

予報官の「学校」

【第26回】予報官の「学校」

気象群 HP「気象の社」をご覧くださいましてありがとうございます。
今回は「予報官の『学校』」と題しまして、千歳気象隊からお届けいたします。

皆様ご存じの通り、自衛隊には様々な職種が存在しています。その数は航空自衛隊では約30種にものぼり、気象職種もそのうちの一つです。個々の職種が各々の専門性を発揮して航空戦力の運用を支えているのですが、皆が皆、初めからその職種のエキスパートなわけではありません。かくいう筆者もつい一年半前に縁あって気象隊への配属を命ぜられ、ニュースの天気予報しか見たことないような赤子同然の知識で気象職種に飛び込んだ身であります。

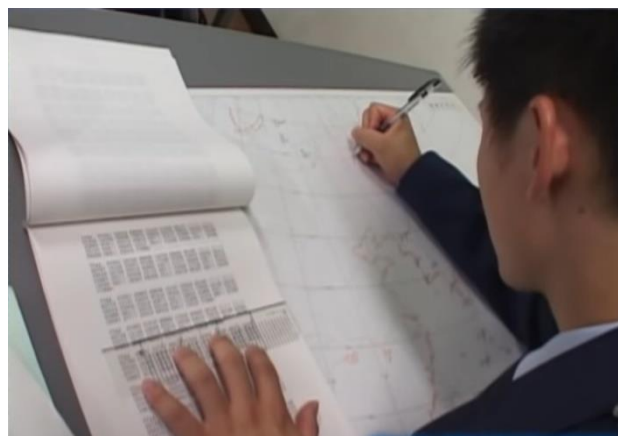
さて、そんな赤子を予報官の卵に仕立て上げるのが今回紹介する教育機関、航空自衛隊第4術科学校です。全国に4つある空自の職種に関する専門知識を付与する組織の一つで気象、情報及び通信等の分野の教育をつかさどります。所在地は日本一の酷暑で有名な埼玉県熊谷市（日本歴代最高気温一位タイ 41.1℃）。ここで約一年間、気象の勉強漬けの日々を送ります。

実際にどのようなことを勉強するのかというと、まず初めに気象予報の基礎となる数学と物理等について要点を絞って学びます。現代の気象予報を行う上で必要不可欠な数値予報がいかに行われているのか、その仕組みを理解するためには必須の内容です。続いて、これらを踏まえて実際の気象現象について学んでいきます。地球規模の大気の循環や各地域の気候特性、台風や高低気圧の構造、雨粒や雲の作り方、雷や竜巻の発生原理等がこれに当たります。ここまでは一般的な気象学、いわゆる生活気象にかかわる部分です。空自の気象支援は航空機の運用が大きな部分を占めるので、航空機に影響を及ぼす乱気流や着氷等に関する航空気象や飛行場の運用などについても学んでいきます。

こうして飛行場の予報を行うための基礎知識をつけながら、それに並行して天気図を解析したり、実際に書いてみたり、パイロットに対するブリーフィングを想定した訓練を行ったりといった実践的な内容も徐々に行われていきます。また、気象庁をはじめとする最新の気象分野に関する講話や、民間の気象会社や航空会社への研修の機会もカリキュラムに含まれており、気象業務に携わる者としての見識を広げるための場が多く設けられているのも紹介すべき点です。

気象学の勉強と聞くと専門的過ぎて身構えてしまうかもしれませんが、気象職種のエキスパートである教官陣は初学者にもわかりやすく要点をかみ砕いて教えてくださいます。加えて、課程履修者は気象職の経験がある者だけでなく、他職種で航空機の運用に携わっていた者、理系知識に明るい者等、経歴や年代も様々で、学生間で知識を共有しながら少しずつ予報官の卵へと成長していきます。ちなみに、陸上自衛隊、海上自衛隊にも気象を扱う職種がありますが、陸上自衛隊の予報官もここで一緒に学びます。一方で海上自衛隊には独自の術科学校があります。

少し前の筆者の生活を紹介するような形となってしまいましたが、航空自衛隊がいかにして予報官を一から育成するのか説明させていただきました。読者の方々が空自の予報官について少しでも興味を抱いていただけたならば幸いです。卵からかえったばかりの筆者は北の大地で冬の大雪や夏の海霧に振り回されながら、今日も元気に気象所で勤務しています。



画像（左）提供元：航空自衛隊第4術科学校学生

画像（右）引用元：熊谷基地 HP